



地域連携室便り

2020年6月 創刊号 Nov. 1

発行元：愛媛県立中央病院 地域医療連携室

直通TEL 089-987-6270（前方連携）

089-947-1165（後方連携）

FAX 089-987-6271

地域の先生方におかれましては、日頃より大変お世話になっております。新型コロナウイルス感染拡大防止においては、各先生方も大変なご苦勞をされている事と思います。当院も感染症指定医療機関としての役割を果たすため、スタッフ一丸となって対応すべく体制を整え頑張っております。

その中で、今まで毎月医療連携懇話会を開催しておりましたが、今後の再開予測が立たない状況が続いており、愛媛県立中央病院として、皆様に情報発信を継続していくために今回【地域医療連携室便り】を作成いたしました。内容はまだ未熟で手作り感満載ですが、何かしらお役にたてればと思っております。どうぞご一読ください。

【今回の内容】

1. 地域医療連携室のメンバー紹介
2. 感染対策チームから医療機関における新型コロナウイルスの感染対策
3. 泌尿器科医からの独り言
4. メール登録のご案内

1. 地域医療連携室のメンバー紹介

➤ 地域医療連携室 室長挨拶



はじめに、新型コロナウイルス感染症に罹患された皆さま、および関係者の皆さまに心よりお見舞い申し上げます。平素は、当院の医療にご理解とご協力を頂き感謝いたしております。2020年4月1日、地域連携室長を拝命致しました三木均と申します。一言ご挨拶申し上げます。私は2010年4月に放射線科主任部長として当院に赴任、画像診断を担当し、主にMRI診断や神経放射線診断を専門としております。2012年4月に画像センター長を拝命、地域医療機関からの種々の検査依頼を積極的かつ迅速に受け入れる体制を強化し高度医療機器の有効利用を図って参りました。これまで多くの症例のご紹介をいただき、心より感謝申し上げます。2015年4月からは地域連携室副室長として、地域医療連携業務に微力ながら携わっております。引き続き、地域医療機関と顔の見える関係作り、切れ目のない受入体制を強化し円滑な連携を構築できるように努めて参ります。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

➤ 令和2年度 後方連携担当紹介



新型コロナウイルスの関係で、新年度になっても御挨拶も出来ない状態が続いておりますが、今年度の後方連携メンバーです。新しいメンバーも加わり、さらに退院支援の強化を図っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。



2. 感染対策チームから医療機関における新型コロナウイルスの感染対策

今年度地域医療連携懇話会も開催できず、顔の見える連携が難しい今、今回感染予防対策に奮闘してくれている院内感染対策委員会に、今の時期に大切なお知らせを書いてもらいましたので、コメディカルの方も是非読んでください。

3. 泌尿器科医からの独り言

次に本来医療連携懇話会で担当予定であった泌尿器科の医師より、今回はちょっと気軽に読んでクスツとして頂ける内容を提供してもらいましたので、続けて読んでくださいね！

4. メール登録のご案内

今まで医療機関の皆様には、医療連携懇話会等の各種ご案内を郵送させて頂いておりましたが、新しい情報をタイムリーにお知らせが出来ないため、今回ぜひメール登録のご検討をお願いしたいと思います。今後出来るだけスムーズな情報提供が出来るように、ホームページの工夫や情報発信の改善に取り組んでいきたいと思っておりますので、ぜひご検討をよろしくお願い致します。



医療機関における新型コロナウイルスの感染管理

医療機関や施設内での新型コロナウイルスのクラスター発生が多数報告され、国内の全感染者の 6 分の 1 ほどが医療機関や医療、福祉施設で生じているとみられています。医療・福祉施設関係者は感染者に曝露する機会が多だけでなく、感染すると自身がひろげてしまうことを考慮し、十分な感染防止策を講じる必要があります。

5月9日時点

国内の新型コロナウイルス感染者は1万5649例。医療・介護・障害福祉の従事者の陽性者（1180人）が占める割合は約7.5%。また院内感染・施設内感染と思われる患者・利用者等（1370人）の占める割合は約8.8%。従業者と患者・利用者等の合計（2550人）は全体の約16.3%。

1. 医療機関や施設内で広がりやすい理由

①症状から感染者を判断することが難しい

新型コロナウイルス感染症と診断された医療従事者について、海外での調査では、初期症状として発熱や咳が現れた人は全体の半数にも満たないことが分かっています。また、発熱、咳、息切れ、のどの痛み、筋肉痛、悪寒のいずれかで新型コロナウイルス感染症を疑った場合でも、感染者の約 85%しか早期発見できないとされています。

②検査でみつけにくい

PCR 検査では感染者の少なくとも 30%程度が陰性（偽陰性）と判定されてしまうことが指摘されています。胸部 CT 検査も、無症状の感染者に行った場合の感度は約 54%との報告がありますので、感染者の半数しか発見することができません。

③発症前からウイルスを排泄

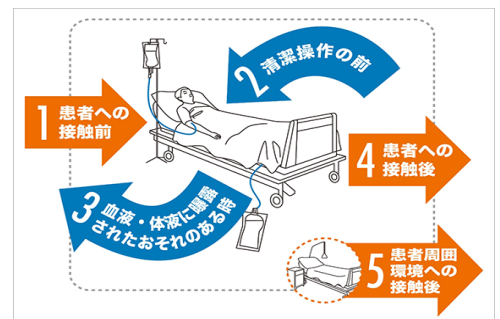
症状が出る 2 日ほど前から直後にかけて、感染者の上気道で増殖するウイルス量が最も多くなるということがあります。感染者の上気道にウイルスがいても、その人が黙って呼吸をしているだけで他人にうつるわけではありません。ウイルス量が多い時期に、口から微細な飛沫（エアロゾル）が大量に発生する状況が、特に狭い空間のなかで起きた場合には、同室者が感染するリスクが生じます。また、マスクをせずに休憩室のような狭い空間で一定時間（目安としては 10～15 分程度）会話をする場合でも、似たような状況が生じると言われています。

2. 新型コロナウイルスの感染対策

①標準予防策の徹底

新型コロナウイルスは飛沫・接触により感染します。診断されてから対策をとっていたのでは感染が拡大してしまうリスクがあるため、通常から手指衛生や咳エチケット、環境整備といった標準予防策の基本を徹底することが重要となります。

手指衛生は WHO の 5 つのタイミングで正しい方法で確実に実施することがポイントです。



WHO 推奨手指衛生 5 つのタイミング

正しい手の洗い方

手洗いの前に
爪は短く切っておきましょう
時計や指輪は外しておきましょう



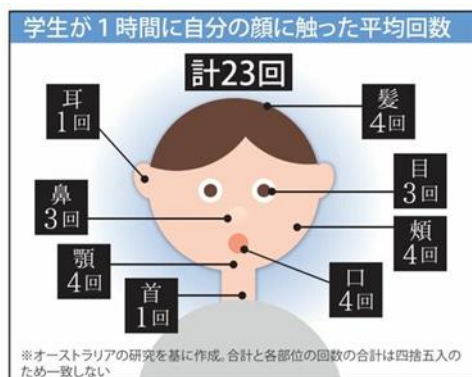
厚生労働省 HP より

咳エチケットで感染拡大防止

咳やくしゃみの飛沫により感染症を他人に感染させないために



厚生労働省 HP より



また、無意識に顔に触れてしまうことで感染を受けたり広めたりしてしまうリスクが高くなります。オーストラリアの大学が2015年に発表した研究によると、被験者になった26人の大学生は1時間に平均23回も顔を触っていました。粘膜部分は口（4回）、鼻（3回）、目（3回）の順に多く、粘膜以外では顎、頬、髪が多かったそうです。意識して触らないよう注意が必要です。

<https://www.wokina.watimes.co.jp/articles/-/558577> より

②「3密」対策の徹底

「3密」は「換気の悪い密閉空間」「多数が集まる密集場所」「間近で会話や発声をする場面」のことです。どの「密」も、会話などで飛び散る飛沫に含まれるウイルスを吸い込みやすい環境にありクラスター発生のリスクが高まります。外来での有症状者のトリアージとともに、待合スペースでの間隔を開ける等の対応も有効です。集団で食事をする際にはリスクがあることを認識し対面での食事を避けたり時間をずらすなどの対応も重要です。

③環境整備

高頻度接触場所（ドアノブや手すり、スイッチ類、パソコンのキーボードやマウスなどOA機器等）や共有スペースは、1日1回以上清拭を行ったり、医療機器等実用機器はこまめに消毒することも有効です。

④その他

どの病院にも新型コロナウイルス感染者が訪れる可能性があるとの前提に立って、感染を疑うべき条件を設定し、どのような患者さんにどのような感染対策を行うのか、職員においてはどのような症状があれば受診をすすめるか、何日間就業停止とするのかということについて各施設での検討が必要です。

医者の独り言



ドベイキーさんのおかげです。



通称ドベイキーとよばれている血管用の鑷子がある。外科系の医師あるいは手術室勤務の経験のある方なら、必ず知っている手術用道具だ。太い静脈をつかんでも滑らないし、強くつかんでも静脈を損傷することもなく手術に不可欠な道具の一つといえよう。

泌尿器科ではリンパ節廓清や腎移植等血管を処置する開腹手術では必ず使う。術中に「ドベイキー」と叫べば、慣れた看護師なら 1.5 秒、新米看護師でも 6 秒で出てくる。

ドベイキーの名前が付いた手術用の機械はほかにも多くあり、不勉強な私は医者になってしばらくは手術器具メーカーの名前と思っていた。学生時代に学んだ大動脈解離の分類を思い出す人もいるかもしれない。DeBakey 分類というやつだ。当時の教科書では英語表記だった。臨床実習で「デバキー分類では 3 型です」などと偉そうに答えて、「君は授業にでてないな」と教授から叱られ、恥ずかしい思いをしたことがあるのは私だけではないと思いたい。もちろん読み方はドベイキー分類が正しい。

とまれ、私にとってはドベイキーといえは長い間、血管鑷子でしかなかった。

ドベイキーが現存する医師であると初めて認識したのは、1996 年にドベイキーが率いる医師団がロシアのエリツィン大統領の心臓バイパス手術をしたとの新聞記事を目にした時のように思う。当時ドベイキーは 88 歳でまだ現役を退いていなかったのだ。この時以来、ドベイキーの名称がついているたくさんの医学的な事象が一人の人間の功績であると、やっと理解するに至った。

その後、私が移植医療にかかわるようになってからは一人の臓器提供者から 4 人の患者に多臓器移植を初めて実施したことや、世界で初めて頸動脈の内膜剥離術を行い、さらに人工血管を使った腹部大動脈の手術等人工血管を医療に導入したことなど、文献をたどれば彼の医療における偉大な足跡に行き着くことが度々あった。

Michael Ellis DeBakey; September 7, 1908 - July 11, 2008

薬局を営むレバノン系移民の父と裁縫師の母のもとアメリカのルイジアナで生まれ育

った。母の影響と思われるが 10 歳の時には自分のシャツを自分で縫い上げることができた。父の薬局で知り合った医師にインスパイアされ地元の医科大学卒業後外科医になった彼はヨーロッパに留学後 30 歳代にアフリカ・ヨーロッパ戦線で軍医として従軍している。勲章を授与されているが、戦場では大きな無力感と挫折を味わったようだ。傷ついた兵士たちを何もできず看取ることが多かったのだ。朝鮮戦争の際には、医師が最前線に常駐し傷ついた兵士をすぐに治療するシステムを作ったりしている。このような戦争体験が、その後の彼の人生に大きな影響を与えたのは想像に難くない。終戦後アカデミズムに復帰し活躍が始まるが、その後の功績は前述したように命を救うことに直結しているものが多い。

ドベイキーは 2008 年に 99 歳で没するまで 70 年以上を現役医師として活躍した。多くの手術や 70 種類以上の手術器具を考案し、500 人以上の外科医を育てたといわれている。ドクター、サージャン、そしてメンターとしても超人だった。

今はアーリントンで眠っている。

そして私は・・・今日も血管をつなぎながら、手術室の中でドベイキーを叫ぶ。まるでドベイキー助けてくれと言っているかのように。

おそらく世界中で同様の光景が毎日くりひろげられていることだろう。

多くの外科医がそうであるように、私も困難な手術の後は謙虚な気持ちになれる。時々こう思う。

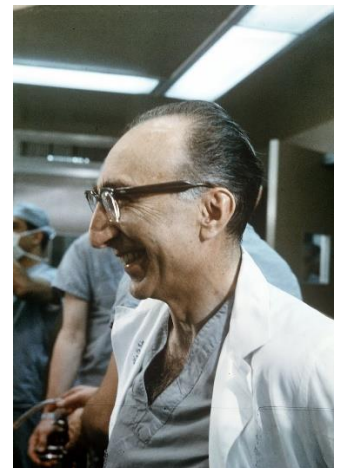
「いつも呼び捨てして、すみません」

「今日の手術がうまくいったのもドベイキーさんのおかげです」

文 泌尿器科 岡本賢二郎

鑷子は大事に使え
呼び捨ては許さん

俺に感謝とかありえん。
周りに感謝せい



58 歳のころのドベイキー

参考サイト https://en.wikipedia.org/wiki/Michael_DeBakey

メール登録のお願い

令和2年6月8日
愛媛県立中央病院
地域医療連携室長
三木 均

現在、医療機関の皆様への各種ご案内（お知らせ）は「郵送またはメール」で送付させていただいておりますが、様々な情勢を考慮し、今後当院では、医療機関の皆様へのご案内やお知らせ（医療連携懇話会案内など）はぜひメールでの配信を推奨させていただきたいと考えております。また、今回創刊した地域連携室便りはメール配信を主な発信方法とする予定です。ホームページからも地域連携室便りが閲覧できる方法も検討しておりますので、ホームページのタイムリーな更新情報もメールで配信する予定です。

メールでの配信を希望される医療機関様につきましては、お手数ですが、下記メールアドレスへ医療機関名を記載し、送信をお願い致します。

ご多忙中大変恐縮ですが、ご理解、ご協力よろしくお願い申し上げます。

なお、引き続き「郵送」を希望される医療機関様につきましては、回答は不要です。

ご不明な点等は、下記担当者までご連絡ください。

※現在メール配信で対応させていただいている医療機関様も送信をお願い致します。

<送信先>

・E-mail：c-renkei@eph.pref.ehime.jp

<件名>メール登録（医療機関名）

<本文>

- ・医療機関住所、電話番号
- ・ご意見やご希望などあればご連絡下さい。

<締切>

・令和2年6月22日（月）

【お問合せ先】

愛媛県立中央病院
地域医療連携室 担当：塩出・赤松
TEL：089-987-6270
FAX：089-987-6271
E-mail：c-renkei@eph.pref.ehime.jp